ディズニー映画 *Frozen* に見える宗教的世界観・人間観
―レリゴーと仏教―

Buddhist View of the World and Sentient Beings Expressed in *Frozen*

鈴木隆泰*
SUZUKI, Takayasu

Abstract

Frozen, which is a 2013 American animated film produced by Walt Disney Animation Studios, has become one of the most popular films in the world. This is partly because that it has a very appealing theme song "Let It Go." In this film the phrase "let it go" can be interpreted in the following two ways: One is "To forget; to stop worrying about," and the other is "To allow to escape; to set at liberty; to lose one's hold of." This paper attempts to examine religious, especially Buddhist, view of the world and sentient beings expressed in *Frozen* through these two interpretations of the phrase "let it go."

キーワード：アナと雪の女王、Let It Go、本当の愛・本当の自分、サンスカーラ、宗教が生まれた理由、法華経・妙法蓮華経、宮沢賢治

１．問題の所在
２．物語のあらすじと Let It Go
　２－１．Let It Go の背景
　２－２．Let It Go
　２－３．Let It Go のあと
３．*Frozen* に見える宗教的世界観・人間観
４．*Frozen* に見える仏教的世界観・人間観
５．結論

*山口県立大学大学院国際文化学研究科教授、博士（文学）
Professor, Graduate School of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University. D.Litt.

1．問題の所在

2013 年に公開された、ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオズ製作の劇場版映画 *Frozen*（邦題『アナと雪の女王』）は、日本を含め世界中で記録的なヒットを収め、アニメーション映画としての興行収入は全世界歴代一位となったという[1]。*Frozen* がこれほどまでのヒットとなった理由には、魅力的なストーリー[2]やキャラクターの他に、主題歌である Let It Go の影響も少なくないように思われる[3]。この Let It Go は原曲の英語以外にも 42 カ国語に翻訳された[4]。日本語にも高橋知伽江氏によって「レット・イット・ゴー～ありのままで～」として訳出され[5]、松たか子と May J. 両氏によって歌唱された。

さて、邦題の「レット・イット・ゴー～ありのままで～」から分かるように、邦訳に際して原題・原詞の“let it go”に「ありのまま」という和訳語が充てられている。しかし、“let it go”という成句は通常「忘れてしまいなさい」「気にするな」という意味で用いられるため[6]、この句が「ありのまま」と邦訳されたことに異議を唱える者も少なくない。代表例として、小野［2014］を紹介しておこう。

> “Let it go”とは、怒りや不安でさいなまれている人に、そんなことは忘れてしまいなさいよ（“forget about it”）、と呼びかける言葉だ。だが、忘れてしまえといっても、コンピューターのキーをおして消去するように記憶を消してしまうことはできない。「忘れてしまう」こと「気にしない」ということの中身は、自分自身に怒りや不安を起こさせるような嫌なことを無視できる力を持つこと、耐性力をつけることだ。そうすることで、脳の中には記憶そのものが残っていても、「気にしない」こと、「忘れてしまう」ことができる。これが“let it go”の中身なのだ。
>
> 積極的に自分が耐性力をつけることで、嫌なことが自分に影響力を持たないようにする。嫌なことを自分の力でどこかにやってしまう。これはポジティブな力だ。―中略―
>
> “Let it go”の歌が教えてくれることは、人より少し強い力をもっているがゆえに自分が社会と適合しないのではないかと不安でさいなまれている人がいたら（それが特に自分自身であったときに）、「そんなことは忘れてしまいなさいよ」「気にしなさんな」と言ってあげよう、ということだ。そうすることで、その人は自分がためらっていた力を存分に発揮できるようになる。

辞書の解説にも従っており、小野［2014］の指摘は十分に納得できるものである。加えて、筆者の務める山口県立大学に勤務する、合衆国出身の英語ネイティブ教員に尋ねても、“let it go”の意味としては即座に「忘れてしまいなさい」「気にするな」という答えが返ってきた。小野［2014］も言うように、多くの英語ネイティブにとっては、〝“let it go”といえば当然、「忘れてしまいなさい」「気にするな」という意味だ〟ということなのであろう。

ただ、原義に立ち返るならば“let it go”は、「“go”したがっている（行きたがっている）“it”（それ）を“let”させろ（そのようにさせろ）」という構造を持った成句であり、これを映画の文脈に適応させれば、「隠していた氷の魔力（it）を解放し（let go）、〈ありのままの自分〉に返ろう」という意味にも十分に解し得る[7]。すなわち主題歌の邦訳に際しては、「忘れてしまいなさい」「気にするな」というネイティブの第一義的理

解よりもむしろ、こちらの原義に立ち返った理解が優先されたことになるのであろう[8]。

それでは *Frozen* における“let it go”の意味としては、「忘れてしまいなさい」「気にするな」が相応しいのであろうか、それとも「隠していた氷の魔力を解放し、ありのままの自分に返ろう」が相応しいのであろうか。結論の一部を先取りにするならば、筆者は *Frozen* における“let it go”の意味には、これら両義が同時に読み込まれていると見ている。ただ、日本では一般的に「ありのまま」が肯定的に解釈されていることに対しては、主題曲 Let It Go の「ありのまま」は、否定されるべき「身勝手なありのまま」であると筆者は理解している。そしてそこにはこれまで指摘されてこなかった、宗教的な、特に仏教的とも見なしうる世界観・人間観を *Frozen* に見出せる可能性が存在している。

本稿は *Frozen* における“let it go”の意味の問い直しを端緒として、世界的に影響を及ぼした同作品に見られる宗教的世界観・人間観を探る小論である[9]。

２．物語のあらすじ[10]と Let It Go

２－１．Let It Go の背景

王国アレンデール Arendelle に二人の王女があった。姉で王位継承者のエルサ Elsa と妹のアナ Anna である。エルサは生まれつき、ものを凍らせる能力（氷の魔力）をそなえていた。これは誰かに呪われたものではなく、彼女の生来の能力であったことに注意しておきたい[11]。しかも幼い頃は、この力を使って姉妹で仲良く遊ぶこともできていた。ところが遊んでいる最中、誤ってアナの頭に魔法を当ててしまい、彼女を意識不明の状態に追い込んだことで事態は一変する。妖精トロール Troll の長であるグラン・パビー Grand Pabbie の治療によってアナは一命を取り留めるものの、パビーは「安全のため（To be safe）」という理由で、アナの記憶からエルサが能力を持っていること自体を消去した。エルサの能力は彼女の成長とともにどんどん大きくなっていくことが予想されたため、パビーは「魔力には美しい面もあるが、同時に大きな危険もある。お前さんは力を制御できるようにならなければならない。怖れが、お前さんの敵となるじゃろう。（There is beauty in it. But also great danger. You must learn to control it. Fear will be your enemy.）」と諭す。すると父である王は「大丈夫、娘はきっとできるようになる。（She can learn to control it, I'm sure.）」と応え、「エルサを守る（We'll protect her.）」ためという理由で、「それまではお城の門を閉ざそう。雇い人も減らそう。（Until then we'll lock the gates. We'll reduce the staff.）」、そして「他人との接触を制限し、娘の力を人目に触れさせないようにしよう。アナも例外ではない。（We will limit her contact with people and keep her powers hidden from everyone. Including Anna.）」と決める。このことによりエルサとアナは、同じ城に住んでいるにもかかわらず引き離され、お互いに顔も見ず、ほとんど声も交わさずに過ごすことになった。しかも、エルサの力についてはアナも含めて誰にも告げないという方針のもと、アナには引き離された理由すら告げられなかった。そのため自室に引き籠もる姉のエルサに対してアナには、「なぜ〔引き籠もるの〕か理由ぐらい教えてくれればいいのに。（I wish you

would tell me why.)」という不満が募ることとなった。

一方、エルサは父から魔力を抑える手袋を与えられ、「力を隠しておきなさい。意識しないようにしなさい。人に見られないようにしなさい。(Conceal it. Don't feel it. Don't let it show.)」と指示される。しかし彼女の成長とともに力も強くなり、そのことにエルサは「ダメ！触らないで！お願い。お父さんたちを傷つけたくないの。(No! Don't touch me! Please. I don't want to hurt you.)」と恐怖する。エルサにとって自分の生来の力は、かつて最愛の妹アナを傷つけ、今後も廻りの愛しい人々に害を与えかねない「忌むべき呪われた力」と感じられてしまうようになっていたのである。でも、それでも彼女が孤独に耐えていたのは、「自分が我慢すれば済む」「愛すべき者のためには自分が犠牲になればいい」という想いがあったからであろう。寂しさや苦しさに耐えかねて、本心では両親に抱きしめて欲しいにもかかわらず、彼女が発した「ダメ！触らないで！お願い。お父さんたちを傷つけたくないの」という悲痛な叫びからは、彼女のそのような想いを十分に読み取ることができる。

エルサとアナは触れ合うことがないままに時が過ぎ、両親（国王と王妃）の海難事故死という悲劇の起きた三年後、成人となったエルサが新しい女王として即位することとなった。戴冠式を挙行するためやむを得ず、「今日だけよ。(It's only for today.)」と、彼女は長らく閉ざしていた城門を開けて人々を招き入れる。自分の「忌むべき呪われた力」が列席者の面前で彼女の意思に反して発動し、今まで隠し続けてきた秘密が露呈してしまうのではないかと恐れる彼女は、亡き父の遺影に向かいながら、「人々を入れてはいけない。彼らに見られてはならない。いつもこれまで通りの〈いい子〉でいなさい。(Don't let them in. Don't let them see. Be the good girl you always have to be.)」という遺訓を思い返しつつ、「隠しましょう。意識しないようにしましょう。演じきってみせましょう。(Conceal. Don't feel. Put on a show.)」と自分に言い聞かせる。それは「もし少しでもへまをしたら皆に知られてしまう。(Make one wrong move and everyone will know.)」という恐怖との闘いでもあった。

能力が発動し始める中、間一髪というタイミングで戴冠式を済ませ、エルサはアレンデール国の新しい女王 Queen Elsa of Arendelle となった。戴冠式後のパーティーで久しぶりに対面した姉妹は、束の間の再会に喜びと幸せを感じる。「こんなに楽しかったことなかった。本当に最高。いつもこうだといいのに。(I've never been better. This is so nice. I wish it could be like this all time.)」と申し出るアナに対し、エルサも「私もよ。(Me too.)」と返答するものの、即座に「でも、できないわ。(But it can't.)」と拒絶する。アナに「どうしてできないの？（Why not?)」と問われても、一緒にいては再び妹を傷つけるおそれがあり、しかも自分の能力については秘しているため、エルサは「どうしてもよ。(It just can't.)」と答えるしかなかった。アナは落胆し、エルサの前から退座する。去っていくアナを見送るエルサの寂しそうな表情は、非常に痛々しく感じられる。

失意のアナは、「生まれて初めて（For the first time in forever)」大勢の人々と交流できた興奮状態の中で、“逆玉の輿”を狙って近づいてきたハンス王子 Prince Hans of the Southern Isles の術中に陥り、

その日に出会ったばかりであるにもかかわらず、彼の素性を良く確かめぬまま結婚の約束を交わしてしまう。「ある日突然、姉は私を拒んだの。理由は分からないけど。(One day she just shut me out, and I never knew why.)」、「今までの私の人生は、目の前にドアが並び続けているだけだった。(All my life has been a series of doors in my face.)」という人生を送ってきたアナにとって、「もし僕だったら絶対に君を拒まないのに。(I would never shut you out.)」と言葉巧みに言い寄ってくるハンスは、非常に魅力的に映ったのであろう。無垢で精神的に幼いアナには、「愛とは開いたドア（Love is an open door.)」という短絡的な思考しかできなかったのである。

当然ながら、姉で女王のエルサは彼女らの婚姻を認めることはできない。それは、二人がその日に出会ったばかりという理由のみならず、彼女らがハンスの兄たちともども、この城に住もうとしていたことも関係しよう。自分の能力をひた隠しにするエルサにとって、城に住む人間が増えることなど認めることができようはずもなかったのである。「あなた方は私に結婚を祝福してもらいたかったようですが、答えは否(いな)です。(You asked for my blessing, but my answer is no.)」と、またもやアナを拒み、「もうパーティーはお開きにします。お城の門を閉ざして。(The party is over. Close the gates.)」と家来に命じた。「お姉ちゃん、お願い、お願いよ。もうこんな暮らしはいやなの！（Elsa, please, please. I can't live like this anymore!)」とすがりつくアナに対し、エルサはアナを守ろうとするがあまり、「ならば出て行きなさい。(Then leave.)」と突き放してしまう。この際、去りゆくエルサを止めようとしてアナはエルサの左手を掴み、エルサの左の手袋が外れてしまっていた。突き放されたアナは、「私が一体あなたに何をしたというの？　どうして私を拒むの？　どうして世界の全てを拒むの？　何をそんなに恐れているのよ！？(What did I ever do to you? Why do you shut me out? Why do you shut the world out? What are you so afraid of!?)」とエルサにきつい言葉を浴びせる。拒絶の理由を知らない妹からの厳しい言葉に耐えかねて感情の一部を弾けさせたエルサは、左手の手袋を失っていたため、ついに衆人の面前で彼女の秘めた氷の能力を発動させてしまう。自分の力を知られ、国民を怯えさせてしまったエルサは、一部の心ない人から「化け物！（Monster!)」呼ばわりされたこともあり、いたたまれなくなって城を去り、独りで北の山the North Mountainへと向かう。そして山を登るエルサが歌う曲が、主題歌であるLet It Goなのである。次節で歌詞を適宜引用しながら、解釈を行なっていこう。

２－２．Let It Go

The snow glows white on the mountain tonight, not a footprint to be seen.

A kingdom of isolation and it looks like I'm the queen.

今宵、この〔北の〕山は雪で白く光り、〔私以外の〕足跡はなにひとつない。

〔ここは〕“独りぼっちの王国”ね。そして私は〔アレンデールではなく、この国の〕女王みたいね。

エルサが、自分は懐かしい故郷や人々の元を離れて孤独である、独りぼっちである、と思っていること

に注意しておこう。

The wind is howling like this swirling storm inside.
Couldn't keep it in. Heaven knows I tried.
風がうなりをあげているわ。まるで私の中で逆巻くこの嵐のように。
隠しておけなかったわ。〔でも〕私が頑張っていたってことを誰も分かってくれない。

愛する家族（特に妹のアナ）を守るため、両親の言いつけを守り頑張ってきたのに、その努力が誰にも評価されないまま失敗に終わってしまったことを、非常に残念に感じている。

“Don't let them in. Don't let them see. Be the good girl you always have to be.
Conceal, don't feel, don't let them know.”
Well, now they know!
〔お父様は仰ったわね〕“人々を入れてはいけない。彼らに見られてはならない。いつもこれまで通りの〈いい子〉でいなさい。
力を隠しておきなさい。意識しないようにしなさい。人に知られてはいけない”と。
でも、もうみんなに知られてしまったわ！

傷心のエルサは両親（特に父親）の遺訓を思い返しながら、その遺訓が守れなかったことを再確認している。そして、父親からもらった魔力封じの手袋のうち、一つ残っていた右側を宙に投げ、手放す。それは彼女の、父の遺訓からの、より端的に言えば、父の束縛からの脱却･解放宣言であったのである。以下、肝心の“let it go”の歌詞の登場となるが､邦訳に際してはまずは最も原音に近いと思われるカタカナ語「レリゴー」に置き換え、文脈全体を考慮した後で訳語を確定することとしたい。

Let it go! Let it go! Can't hold it back anymore.
Let it go! Let it go! Turn away and slam the door.
I don't care what they're going to say.
Let the storm rage on.
The cold never bothered me anyway.
レリゴー！　レリゴー！　もうこれ以上秘密にしておけないもの。
レリゴー！　レリゴー！〔過去やアレンデールの人々に〕背を向け、扉を閉めてやろう。
もう人々になんと言われようとも気にしないわ。
〔私の外でも内でも〕嵐を吹き荒れさせよう。
寒くて困ることなんか、私、少しもなかったんだわ。

「**１．問題の所在**」で確認しておいたように、英語ネイティブの間で“let it go”といえば、まずは「忘れてしまいなさい」「気にするな」の意味を持つものとして理解される成句である。直前に父の「隠しておけ、見せるな、いい子でいなさい」という遺訓を思い返し、手袋を捨て去ることで父の遺訓からの、そして父自身からの決別を宣言している以上、エルサの発する“let it go”に、「もうお父様の言いつけなんか気にしないで生きていくわ」という意味を認めることは十分に首肯される。そしてこの理解は、後続する「〔過去やアレンデールの人々に〕背を向け、扉を閉めてやろう。もう人々になんと言われようとも気にしないわ（Turn away and slam the door. I don't care what they're going to say.）」によっても裏付けられるであろう。

彼女の内では、これまでも常に嵐が吹き荒れていた。それを「隠しておけ、見せるな、いい子でいなさい」という父の言葉のもとで抑え込んでいたのである。その過去の言葉・呪縛から自らを解放したエルサは、「〔私の外でも内でも〕嵐を吹き荒れさせよう。寒くて困ることなんか、私、少しもなかったんだわ。（Let the storm rage on. The cold never bothered me anyway.）」と言ってから自らのマントを脱ぎ捨てるのであった。このように考えると、本作品においても“let it go”の第一義はもちろん「忘れてしまいなさい」「気にするな」であるが、そこに同時に「氷の魔力を持った〈本当の自分〉を解放しよう、取り戻そう」という意味が込められていると考えても何ら矛盾は生じない[12]。以上の点に鑑み、筆者は本作品における“let it go”に、「忘れてしまいなさい」「気にするな」と、「隠していた氷の魔力を解放し〈ありのままの自分〉に返ろう」の両義が同時に読み込まれていると考えるものである。

ただし、彼女の目指す〈本当の自分〉〈ありのままの自分〉が、他者を拒絶した孤独状態で取り戻されるのだと彼女が考えていることには注意しておきたい。次章以降で主たる考察対象とすることとする。

It's funny how some distance makes everything seem small.

ほんのこれっぽちの距離を置くだけで、全てが小さく見えるなんておかしいわね。

ここでは「アレンデールと孤独の王国との距離間」が、物理的なものよりむしろ精神的なものによってより強く感じられていることが知られる。これが、父の遺訓を忘れ（let it go）、彼女の目指す〈本当の自分〉〈ありのままの自分〉を解放した（let it go）ことによって得られた「精神的な距離感」なのである。

And the fears that once controlled me can't get to me at all.

今まで私をコントロール（抑圧、支配）していたあの恐怖も、もう二度と私には手を出せないの。

幼少期に妹のアナを傷つけて以降、氷の魔力（生来の能力）をコントロール（制御）するようエルサは言い聞かされ、自分でも留意し続けてきた。しかし彼女にとってそのコントロールは、自分の能力をきちんと使おうとする「制御」という意味でのコントロールではなく、「再び傷つけたらどうしよう。知られたらどうしよう」との恐怖（fear）に起因する「抑圧、支配」という意味でのコントロールに過ぎなかっ

たことが分かる。

No right, no wrong, no rules for me.

I'm free!

私には善も、悪もないわ。どんなルールも私には通用しない。

私は自由（無制御、無軌道）よ！

他者と触れ合う以上、その関係を保つための何らかのルールは絶対に必要となるし、その中では善・悪の規範も定められる。それがない、ということは、他者との触れ合いがない状態においてはじめて可能となる。他者との触れ合いがなく、孤独であるため、彼女は自由になったのである。ここでいう「free（自由）」は、拘束・束縛からの解放を意味する「liberty」と同義ではなく、むしろ「無制御、無軌道」の意味合いが強いと判断される。

Let it go! Let it go! I'm one with the wind and sky.

レリゴー！　レリゴー！　私は〔孤独の王国の王女かもしれないけれど〕風や空とは一緒なの。

他者との触れ合い・共存を拒絶しても、「ありのままの大自然」と一緒だから自分は大丈夫だ、という意識が見て取れる。

Here I stand, and here I'll stay.

Let the storm rage on.

私は今この境地に達し、これからもこの境地にあり続けよう。

〔私の外でも内でも〕嵐を吹き荒れさせよう。

「ここ（here）」とは、北の山の中腹に彼女が魔力で作り出した氷の城のある物理的場所と同時に、人々を拒絶した「孤独の王国」「〈ありのままの自分〉を解放した境地」という状態・境地をも表していると読むことが可能であろう。

I'm never going back. The past is in the past!

私はもう後戻りはしないわ。昔のことはもう「過去」に置いてきたんだもの。

この箇所は“let it go”の一義的意味が、やはり「忘れてしまいなさい」「気にするな」であることを物語っている。

Let it go! Let it go! That perfect girl is gone!

Here I stand in the light of day.

レリゴー！　レリゴー！　あの〈いい子〉はもういないのよ！

私はこの境地・状態に、〔部屋に引き籠もらずに〕日の光を浴びてあり続けるのよ。

エルサはアレンデールの女王としてのドレスを捨て去り、孤独の王国の女王のドレスを氷の魔力で作り出す。そしてみんなの中で引き籠もって（自分の能力を抑えつけて）生きるのではなく、たとえ孤独でも、自分を解放して生きるのだと宣言している。この箇所における“let it go”は、「自分、あるいは自分の能力を解放しよう」と解釈するのが最も相応しい。

Let the storm rage on.

The cold never bothered me anyway.

〔私の外でも内でも〕嵐を吹き荒れさせよう。

寒くて困ることなんか、私、少しもなかったんだわ。

寒くて困っていたのは周りの人たちだけであり、彼らを全て切り離し拒絶してしまえば、自分は少しも困らなかったのだ、さぁ、力を解放し、内でも外でも嵐を吹き荒れさせようという、まことに「孤独な氷の女王」、いや、むしろ「孤独な氷の魔女」に相応しい発言である。扉を閉めて他者を拒絶する彼女の表情には、もはや本格的な「魔性」が宿っているのが確認される。

もし、この時点をもってエルサが〈本当の自分〉〈ありのままの自分〉を取り戻したのだとしたら、「たしかに別離はあるけれど、彼女が幸せになったのならいいじゃないか。これはこれで認めてあげようよ。めでたし、めでたし」というかたちで、この作品は終わりを迎えていたことであろう。しかし実際はそうはならなかった。〈本当の自分〉〈ありのままの自分〉を取り戻し、幸せになったはずのエルサはこの後、最愛の妹アナを死の淵へと追いやっていくのである。

２－３．Let It Go のあと

エルサを取り戻そうと追いかけるアナは道中で、氷売りのクリストフ Kristoff、彼の相棒であるトナカイのスヴェン Sven、そしてエルサが魔力で作り出した雪だるまのオラフ Olaf と出会い、彼らともにエルサの城へと至る。孤独の王国の女王となっていたエルサは、「自分に何ができるのか知らなかったの。(I never knew what I was capable of.)」と現状に満足していることを伝え、アナに「あなたはアレンデールの人間よ。(You belong down in Arendelle.)」と、アレンデールに戻ることを勧める。アナが「お姉ちゃんもよ。(So do you.)」と言っても、エルサは「いいえ、アナ、私はここの人間なの、たった独りで。ここなら誰をも傷つけることなく〈ありのままの自分〉でいることができるの。(No, Anna, I belong here alone where I can be who I am without hurting anybody.)」と答え、独りぼっちで皆と距離を取ることによってしか〈ありのままの自分〉〈本当の自分〉ではいられないと考えていることをアナに告げる。

そこにオラフが入ってきて、姉妹は暫し、楽しかった幼少期を思い出す。そこでアナは、「お姉ちゃん、〔子供の頃は〕私たちはとても仲良しだったわ。もう一度あの頃のようになれるわよ。(Elsa, we were so close. We can be like that again.)」と切り出す。表情を緩めていたエルサであったが、アナの申し出にかつての事故を思い出し、「いいえ、無理よ。さようなら、アナ (No, we can't. Goodbye, Anna.)」と答えて去っていこうとする。アナが「待って！ (Wait!)」と追おうとしてもエルサは、「いいえ、あなたをただただ守りたいだけなの。(No, I'm just trying to protect you.)」と突っぱねる。しかしアナは「守ってもらわなくても大丈夫。私は怖くないわ。(You don't have to protect me. I'm not afraid.)」、「もう距離を取らなくていいのよ。(You don't have to keep your distance anymore.)」、「怯えて暮らさなくていいのよ。なぜって、生まれて初めて、これから私はずっとお姉ちゃんと一緒にいるから。(You don't have to live in fear. 'Cause for the first time in forever I will be right here.)」と答えて帰らない。するとエルサは「お願いだから帰ってちょうだい。あなたの〔アレンデールでの〕生活が待っているわ。(Please go back home. Your life awaits.)」、「あなたがよかれと思ってやってくれているのは分かるけど、どうか放っておいてちょうだい。たしかに私は独りよ。でも独りだけど自由なの。さぁ、私から離れて。さもないと危険よ。(I know you mean well, but leave me be. Yes, I'm alone. But I'm alone and free. Just stay away and you'll be safe from me.)」と応じた。先の Let It Go の歌詞にあったように、エルサは他者との触れ合いを拒絶し、孤独であることを通して自由を獲得したと思っているのである。しかし、それはただの無制御、無軌道に過ぎなかった。その証拠に、アナがアレンデールがエルサのせいで氷漬けになっている事実を伝えると、北の山で自分さえ皆と距離を取っていれば大丈夫と思い込んでいたエルサは、「あぁ、私は何て愚かなの！　自由になんかなれていない！　私の中で吹き荒れる嵐から逃れる術などなかったんだわ。この呪いを抑えられない！ (Oh, I'm such a fool! I can't be free! No escape from the storm inside of me. I can't control the curse!)」と激しく狼狽する。エルサが自分の氷の能力を「そこから逃れるべき忌まわしき呪い」と捉えていることが明確に表現されている。そしてエルサは「アナ、お願いよ、あなたがいるとどんどん悪い方向に進むわ！　〔私の中は〕恐怖で一杯よ！ (Anna, please, you'll only make it worse! There's so much fear!)」とパニックを起こし、その中で発動された氷の刃が図らずもアナの心を貫いてしまう。それは、「私の姉は化け物なんかじゃない。(My sister is not a monster.)」、「姉は危険じゃないわ。(Elsa is not dangerous.)」、「姉妹なのよ。私を傷つけるわけないじゃない。(She's my sister. She would never hurt me.)」と周囲の人に言うほどに、姉のエルサに全幅の信頼を寄せてきたアナの想いを裏切るものであった。

アナの心にかけられた致死性の魔法を解くため、一行はその方法を知っている、「愛のエキスパート love experts」であるトロールたちのもとを目指す。トロールたちを岩だと思い込んだアナとオラフの前で、トロールたちに話しかけるクリストフを見て、オラフがアナに言った「あいつ、イカれてる。ぼくがあいつの気を引いておくから逃げて。アナ、さぁ、逃げるんだ。なぜって、君のことを愛しているからさ。

(He's crazy. I'll distract him while you run. Because I love you, Anna, I insist you run.)」ということばからは、オラフが何を愛と考えているかの一端が伺える。

正体を現したトロールたちは一行を出迎え、「私たちは愛の力のことを言っているだけなの。それは力強く、そして不思議よ。(We're only saying that love's force. That's powerful and strange.)」、「誰もがどこか完璧じゃないんだ。(Everyone's a bit of a fixer-upper.)」、「私たちは成長するために、お互いに他者が必要なの。(We need each other to raise us up and round us out.)」、「自分が完璧じゃないのに、完璧じゃない他人を直せる唯一の方法は、〈本当の愛〉なのよ。(The only fixer-upper fixer that can fix a fixer-upper is true love.)」と教える。そこに遅れて登場した一族の長グラン・パビーは、「アナよ、お前さんの命は危機に瀕している。お姉さんのせいでお前さんの心は凍り始めている。取り除かなければ、硬い氷がお前さんを凍らせてしまうじゃろう、永遠にな。(Anna, your life is in danger. There is ice in your heart put there by your sister. If not removed, the solid ice will you freeze, forever.)」と告げた上で、「凍った心を溶かせるのは、〈本当の愛〉の行為のみなのじゃ。(Only an act of true love can thaw a frozen heart.)」と明かす。

アナにとっての〈本当の愛〉の行為とは、婚約者であるハンスとのキスに違いないと考えた一行は、アナの命を救うためにアレンデールの城へと向かう。一方のハンスは、北の山にあるエルサの氷の城へと進軍し、エルサを捕らえることに成功した後、アレンデールの城に戻りエルサを牢に幽閉していた。クリストフによってハンスのもとへ無事送り届けられたアナは、ハンスに〈本当のキス〉を求める。しかしハンスは正体を現し、エルサ、アナの姉妹を亡き者にしてアレンデールを乗っ取ろうとする。ハンスによって暖炉の火が消され、まさに凍え死にそうになっているアナの元に、オラフがやってくる。オラフは自分の身が溶ける危険も顧みず、暖炉に火を灯しアナを暖める。オラフに「愛とは自分のことよりもその人のことを大事にすること。(Love is putting someone else's needs before yours.)」と〈本当の愛〉の意味を諭されたアナは、クリストフが自分を、そして自分もクリストフを愛していることに初めて気づかされる。人は自分のことだけを大事にしていては決して幸せにはなれないと、本作品 *Frozen* は主張しているのである。

一方エルサは、自らの魔力を全開にして牢獄より脱出した。吹き荒れる嵐は凄まじく、アナの身を案じたクリストフは、自らを危険に晒しながらきびすを返してアレンデールへと向かった。まさに「愛とは自分のことよりもその人のことを大事にすること。(Love is putting someone else's needs before yours.)」の実践である。また、この嵐の凄まじさは、エルサの内なる嵐も同様に凄まじく吹き荒れていることを物語っている。

嵐の中を彷徨うエルサの元にハンスの魔の手が迫る。ハンスから「彼女は衰弱し冷え切って山から戻ってきた。君が彼女の心を凍らせたって言うじゃないか。(She returned from the mountain weak and cold. She said that you froze her heart.)」、「僕は彼女を救おうとした。でも遅すぎたんだ。(I tried

to save her, but it was too late.)」、「君の妹は死んだんだぞ。君が殺したんだ。(Your sister is dead. Because of you.)」と聞かされ、エルサはその場に崩れ落ちる。その瞬間、アレンデールを襲っていた嵐が止んだ。これは取りも直さず、エルサの内なる嵐も鎮まったことを意味する。

視界が晴れたことで、アナとクリストフはお互いを確認しあうことができた。一方、ハンスも確実にエルサを標的に捉えてしまった。アナは凍り付く寸前の状態である。今、クリストフと〈本当のキス〉をすれば、彼女の心の氷はすぐにでも溶けていたかも知れない。しかし、姉を殺そうと剣を抜いて近づくハンスの姿を見て、アナは最後の力を振り絞り、クリストフではなくエルサの元へと向かう。そしてエルサに向かって振り下ろされる剣先に身を投じたアナは、ついに全身が凍り付き、カウンター的にハンスを弾き飛ばした。

凍り付いたアナを見たエルサは涙を流し、アナを抱きしめる。クリストフやオラフを含め、一同が悲嘆に暮れているまさにその時、アナの氷が胸（心）を中心に溶け始めたのであった。魔力から解放され（“let it go”）、氷が完全に溶けたアナは、エルサと抱擁を交わす。「私のために身を投げ出してくれたのね？（You sacrificed yourself for me?）」とエルサに問われ、アナは「愛しているわ。(I love you.)」と答えた。それを見ていたオラフは「“〈本当の愛〉の行為が凍り付いた心を溶かす”（“An act of true love will thaw a frozen heart.”）」というグラン・パビーの教えを反芻した。アナが自らの生命を投げ出し、「自分のことよりもその人のことを大事にすること」を実践したことで〈本当の愛〉が実現し、それが彼女の凍った心を溶かしたのである。それを聞いたエルサも得心したようで、「“愛が溶かす”　愛、そうよ、愛だわ！（“Love will thaw.” Love. Of course. Love!）」と、怖れではなく愛にもとづいて自らの力を発揮し、凍り付いたアレンデールを溶かしていったのだった。

その後、エルサは自らの氷の能力を人々（他者）を楽しませるために使うようになった。彼女が自らの力を封印したのではないことに注意しておきたい。

３．*Frozen* に見える宗教的世界観・人間観

エルサが備える「氷の魔力」は、誰かに呪われたものではなく、彼女生来の力であった。その点において、氷の魔力は彼女の「能力」であり、「特徴・特質」なのである。幼少期、彼女はその生来の能力・特徴・特質を活用し、妹のアナと楽しく遊んでいた。ストーリーの最後でアレンデールの女王としてのエルサが人々を楽しませるため氷を花火のように打ち上げたり、スケートリンクを作ったりする行為も、すでに幼少期にアナとの間で行っていたものである。しかし、はしゃぎすぎたアナを助けようと放った氷がアナの頭に命中し、彼女を意識不明の状態に追い込んだことで、エルサにとって自らの能力・特徴・特質は、呪われた忌むべき力へと変わってしまった。「その力をコントロールせよ」という指示も、実質的には「抑え込んで使わないようにせよ、なかったことにせよ」という命令として彼女を抑圧し続けた。

映画 *Frozen* におけるエルサの氷を作り出す能力・特徴・特質は、たしかに非常に特殊なものであり、

その点で、エルサが体験した出来事は、エルサ独りに限定された特別なものと映るかも知れない。しかし、人は誰しも他人とは異なる、その人特有の能力・特徴・特質を備えてこの世に誕生する。そして、それが良い面に作用する場合には「長所」と呼ばれる反面、悪い面に作用する場合には「短所」と呼ばれるのである[13]。「長所を伸ばし、短所を抑えよう」と叫ばれることもあるが、長所にせよ短所にせよ、どちらもその人に生来備わっている能力･特徴･特質の表と裏であるに過ぎない。そのため、「短所を抑えなくては」と思い込み、その通りに実践してしまうと、その人に生来備わっている能力・特徴・特質そのものを抑圧してしまうことになりかねない。それが本人にとってどれほどの苦しみをもたらすかは、劇中のエルサを見るまでもなく、容易に想像がつくであろう。大切なことは、自らの能力・特徴・特質を抑え込んで萎えさせることではなく、自らの能力・特徴・特質が長所として発現する機会を増やし、短所として発現する機会を減らすよう、コントロール（制御）することなのである。もしそのコントロールが「制御」ではなく「抑圧」となってしまった場合、その行為は当の本人の全否定にもつながってしまうのである。

しかし、自分の能力を制御することなく、それが発揮されるままに任せるのであれば、他者とともに生きていくことはできなくなる。どんな能力・特徴・特質にもプラスの面（長所）とマイナスの面（短所）があり、マイナスの面も含めて発揮してしまうと、他者や、場合によっては自分自身をも傷つけてしまうことになるからである。エルサが父の遺訓を忘れて（“let it go”し）､それまでの抑圧から解放されて（“let it go”して）獲得した〈ありのままの自分〉は、無制御・無軌道のため、ある意味では「本能むき出し」であり、社会性を完全に欠いた存在であった。それゆえ、彼女は独りで「自らの城」に籠もり、他者と接触を断つしかなくなる。その時点での彼女は、他者との交わりよりも、自分の能力の無制限解放の方を選択したのである。彼女は、他者よりも自分を優先したのである。その結果、彼女の城にやって来て一緒に帰ろうと提案するアナのことを気遣うよりも、自分の気持ちが荒ぶることを怖れパニックを起こし、そして自分の能力・特徴・特質をマイナス方向に発動させ、愛しているはずの妹アナを死の淵へと追いやってしまう。愛を「自分のことよりもその人のことを大事にすること」と定義していることから､本作品は「他者よりも自分を優先しては、人は幸せになれない。それは愛ではない」という世界観・人間観を提示していると理解して構わないであろう。そしてこの世界観・人間観はそのまま、宗教が提示する世界観・人間観に重なり合うのである。ここで、人類の文化史の中で「宗教」が生まれた理由に関して、鈴木［2014: 330-332］における議論を振り返っておきたい。

> 他の生物にはない人類のみが有する器官のうち、最も特徴的なものの一つが「手」であることは論を俟たない。人類は「直立歩行」をすることで、他の生物には叶わなかった二つのものを獲得した。それは、脊椎で真下から支えることによる「大脳」の驚異的な発達、および、移動手段を足（後脚）のみに委ね、前脚を移動手段から解放したことによる「手」の獲得である。進化した大脳の働きを受けて人類の手は様々なモノを生み出し、そして手を使うことでさらに大脳に刺激を与えて進化を促すという「正のフィードバック」を経て、人類の能力はとどまることなく拡大し続けていった。

人類は、走る速度は熊より遅く、皮膚の厚さは象より薄く、泳ぐ能力はサメに及ばず、爪や牙の鋭さ・強さもライオンや虎に遠く及ばない。このような「弱い」生物が地球上で繁栄できた理由はただ一つ、「人類が発達した脳と手を使ってモノを生み出してきたから」に他ならない。人類は身を守るため、そして食糧を確保するため「武器」を生み出した。速く快適に移動するため「動力機関（エンジン）」を生み出した。もちろん、ダムを建設するビーバーをはじめ、モノを作る生物は人類に限らない。しかし、「自分の都合のよいように状況を変える能力（弱くても武器を持てば強くなる。遅くとも乗り物に乗れば速くなる、など）」において、人類は他の生物の追随を全く許さない。そして大脳と手との「正のフィードバック」の中で、人類は生み出すモノを果てしなく「進化」させていった。その結果、自分の身を守るはずだった武器は「核兵器」となり、人類の存亡を脅かしている。また、快適に移動するためのエンジンは化石燃料を燃やし、世界的な環境破壊の一因ともなってしまっている。

無論、人類は自らに害をなそうとしてモノを作ってきたのではない。また、「自分にとって都合のよい状況を望む」のも、何も人類に限られたことではなく、全生物共有のものであろう。しかし、どんな生物も持っているその願望を、人類は手を獲得することによって無制限に拡大・肥大させることが可能となってしまった。その結果、よかれと思って行ったことが、皮肉にも自らの首を絞めるという逆転構造が現出されてしまったのである。

人類は、「根元的な身勝手さ」を無制限に暴走させることができる唯一の生物となった。そしてその暴走は、最終的には人類自身に仇をなすことになる。われわれの祖先は人類となった後、自らが有するに至ったこの能力に恐怖し、なんとかその暴走を抑え込む手段・装置を開発する必要に迫られたに違いない。そして、その手段・装置が「宗教」であるとはいえないだろうか。

人類は自らの「手」によって素晴らしい文化・文明を築き上げた。グラン・パビーのエルサに対する教訓に基づけば、それはまさしく「美（beauty）」と表現されるに相応しい。しかし、われわれ人類は他者に対する恐怖（fear）に駆り立てられて武器を作り続け、遂には核兵器という、人類を絶滅させる「致死性の魔力」を持つに至ってしまった。

人類全てにとっての「手」、それがエルサにとっては「氷の能力」であり、われわれ一人一人にとっての「生来の能力・特徴・特質」に相当する。われわれが自分の能力・特徴・特質を、「恐怖（fear）ゆえに自分にとってだけ都合がよいように」使おうとすると、それは他者はおろか自分自身に災いをもたらすことになる。*Frozen* が提唱している「愛」とは、自らの能力・特徴・特質を他者のためを思って行使するときに、はじめて実現する美しいもの（beauty）なのである。エルサは「〔私の中は〕恐怖で一杯よ！（There's so much fear!）」と、アナのことを慮るよりも自分が恐怖を感じていることに囚われ、そこから生じるパニックのために自らの力でアナを瀕死の状態に追い込み、そのせいでエルサ自らも苦悶した。しかし、「氷を花火のように打ち上げる」「夏にスケートリンクを作って皆を楽しませる」「オラフに彼専用の雪雲を作っ

てあげて、夏でも溶けないようにする」など、同じ力を他者のために使うとき、それはまず他者に幸せをもたらす。そして幸せとなった他者との「繋がり」が生まれ、自分自身も幸せになっていく。一方のアナにも、自分がクリストフと結ばれれば命が助かるというのに、自分のことは後回しにして姉エルサのためにその命を捧げたことで、かえって彼女自身の命が助かり、姉・妹の関係も修復され、アレンデールの氷も溶け、そしてクリストフとも無事に結ばれるという幸せが訪れたのである。

４．*Frozen* に見える仏教的世界観・人間観

このように、*Frozen* に「相手の幸せのために行動することによって、自分が幸せになる」という、宗教的な世界観・人間観を読み取ることが可能であることが明らかになった。では、その世界観・人間観はどの宗教に基づくものと想定できるであろうか。*Frozen* の原作はデンマークのアンデルセン童話所収『雪の女王』とされ、製作も合衆国のウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオズであることから、その宗教を「キリスト教」と見なすことが自然であるように思われる。たしかにキリスト教では〈隣人愛〉が説かれ、他者の幸せを優先することが強調されている。

> わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です[14]。

ただし、この『新約聖書』からの引用で分かるように、他者を愛すること（他者の幸せを優先すること）は「神から受けた掟」であり、自発的に守るべき心構えや行動規範などではない。キリスト教徒にとっての〈隣人愛〉は、自らが将来「神の国」に行けるか否かがかかった至上命題のひとつなのである。

> 宗教が、人類の根元的な身勝手さの暴走を抑えるに際して最も一般的に取る方法は、人類をはるかに超える存在（神・創造主）を生み出し、「人類よ、思い上がるな」とその前に跪かせることであり、キリスト教やイスラームはこのケースの典型例である。（鈴木［2014: 332］）

したがって、*Frozen* における世界観・人間観を特定の宗教と結びつけようとするとき、その宗教をキリスト教をはじめとする一神教と想定することは難しいことになる。

三大世界宗教の中で、神・創造主の観念を用いることなく人間の「根元的な身勝手さ」をコントロールしようとする宗教がある。それが仏教である。

> 一方、創造主の観念を用いることなく、この問題に対処しようとした宗教もあった。その代表が仏教である。キリスト教などでは創造主の観念の裏に隠されて教義の表面に出てこない「身勝手さ」を、仏教では「無明（むみょう）（悪しきサンスカーラ、そして苦を生じさせる根本原因）」として教義の前面に押し立てて、その有害性、および制御の必要性を力説し、そして数多の実践法を提示している。（鈴木［2014: 332］）

仏教における〈無明 avidyā〉とは、人が誰でも持っている「根元的な身勝手さ」「他者より自分ばかりを大事にしたがる性根」を意味しており、それをそのまま放っておく（“let it go”してしまう。無明のありのままにしてしまう）ことを「放逸(ほういつ) pramāda」という。放逸のままにしていると、無明に基づいて〈サンスカーラ saṃskāra〉という「自分が今“これが自分だ”と思っている対象を作り出す諸々の形成力・形成作用」がマイナス方向（悪い方向）に発動され、最終的には〈苦を感受する悪しき自分〉が形成されてしまう。これを〈縁起(えんぎ) pratītyasamutpāda〉の「順観(じゅんかん) anuloma」という。順観とは例えば、川下に滝壺のある川にボートを浮かべて乗り込み、川の流れに任せること、川が流れるまま（ありのまま）にさせておく（“let it go”する）ことであり、そのままではいつか必ず滝壺へと呑み込まれてしまう。

縁起の順観においては、無明を縁として悪しきサンスカーラが生じ、最終的には〈苦を感受する悪しき自分〉が形成される途中の段階で、〈渇愛(かつあい) tṛṣṇā〉が生じるとされている。渇愛とは他者を慮ることなく、自分にとって都合のよいものはどこまでも欲しがり、自分にとって都合の悪いものはどこまでも拒絶しようとする「身勝手な欲望」であり、*Frozen* の説く「自分のことよりもその人のことを大事にする愛」とは正反対である。無明を放置しておくと（放逸にしておくと、“let it go”しておくと）、悪しきサンスカーラが発動されるに任せてしまい（“let it go”）、渇愛という身勝手な欲望が暴走し、最後はその責めを自らが負わなければならなくなる。

一方、縁起には逆方向の「逆観(ぎゃっかん) pratiloma」が存在する。先の例を用いれば、川の流れに逆らって、川上へとボートを漕いでいくことが縁起の逆観である。それは無明を放っておかない（無明を“let it go”させない、無明をありのままにさせない）ことであり、この姿勢を「不放逸(ふほういつ) apramāda」と呼ぶ。不放逸に努力することによって、無明はコントロールされ、〈善い自分〉を形成する〈善いサンスカーラ〉〈プラス方向（川上方向）のサンスカーラ〉が発動されるようになる。途中段階の渇愛は、コントロールされて〈慈悲(じひ) maitrī-karuṇā〉へと転換する。慈悲は、身勝手な欲望である渇愛とは正反対であり、「自分のことを差し置いても他者を思いやって、一緒に喜び、一緒に悲しむ」ことを基本とする。まさしく *Frozen* の説く「自分のことよりもその人のことを大事にする」という愛と軌を一にしていることが分かるであろう。

では、どうすれば不放逸に努力し、無明をコントロールすることができるのであろうか。その答えはすでに出ている。縁起の逆観においては、慈悲を発すためには無明がコントロールされていなければならない。すなわち、「自分のことを差し置いても他者を思いやって、一緒に喜び、一緒に悲しむ」、「自分のことよりもその人のことを大事にする」姿勢を取ろうとすることが、そのままで不放逸に努力し、無明をコントロールすることなのである。

無明がコントロールされれば、〈幸せを感受する善い自分〉が形成される。そしてそのためには慈悲の対象としての他者がなければならない。他者がなければ自分の幸せも実現されないのである。この点について、仏教（特に法華信仰）の篤信家であった詩人で童話作家の宮沢賢治[15]は、『農民芸術概論綱要』や『雨ニモマケズ』の中で次のように表現している。

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない（宮沢［1997a］）

アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
―中略―
ホメラレモセズ
―中略―
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ
南無無辺行菩薩
南無上行菩薩
南無多宝如来
南無妙法蓮華経
南無釈迦牟尼仏
南無浄行菩薩
南無安立行菩薩（宮沢［1997b］）

仏教における〈慈悲〉は、自分が強者の立場に立って、弱者の立場にある者に対して「上から下にお恵みを施してやる、哀れんでやる」という性質のものでは決してない。「慈悲を受ける相手」は、「自分が幸せになるために慈悲を受けて下さる対象」なのである。慈悲を施す側の方が、「慈悲を受け取って下さってありがとうございます。おかげで私は不放逸に修行をすることができました」と感謝するのである。このように、施される側ではなく施す側の方が感謝する修行を、仏教では「布施（ふせ） dāna」あるいは「布施行」と呼び、仏教を代表する修行徳目として重視している[16]。

この布施行を通して不放逸に実践することで縁起の逆観が成立し、無明やサンスカーラはコントロール下に置かれることになる。この際、無明やサンスカーラそのものがなくなってしまうのではないことは殊更重要である[17]。*Frozen* においてエルサは当初、自らの生来の能力を隠し、抑圧し、なかったことにするよう父に教誡されていた。しかしついに耐えきれず、亡き父の教誡を忘れ（“let it go”し）、氷の能力を放逸に解放（“let it go”）してしまったことで、生まれ故郷や妹を危機的状況に陥れ、自らも苦悩することになった。しかし、アナが自らの命を捧げるという究極の布施行を通して〈本当の愛〉、すなわち慈悲を開顕してくれたことで、エルサも自分の能力をコントロール下に置き、〈自分の能力を他者を幸せにするために使うことで、自らも幸せになる自分〉を形成する善いサンスカーラを発動できるようになった。このように、エルサの能力はなくなっていないのである。エルサはエルサのままなのである。

そして、エルサがエルサのままであるように、アナもアナのまま、クリストフもクリストフのまま、オ

ラフもオラフのまま肯定される。これは、劇中の Let It Go における「ありのまま」とは全く違う。Let It Go における「ありのまま」とは、生来の能力・特徴・特質を放逸状態で解放（“let it go”）し、そのせいで他者も自分も傷つけてしまう「無制御、無軌道」な状態を意味していた。それに対して「自分のことよりもその人のことを大事にする」という慈悲を実践する者は、生来の能力・特徴・特質を不放逸にコントロール（これは制御・管理であって、抑圧ではない）することで、その能力を他者のために使い、その結果として自分も幸せになる。キリスト教では「神から受けた掟」というかたちで、神の国に行くという幸せの実現のためには他者を**愛さ**なければならないと説かれていた。それに対して仏教では、神・創造主の観念を用いることなく〈縁起〉に基づく世界観・人間観を提示し、その中で他者を大事にすることで自分に〈本当の幸せ〉がもたらされることを説いている。この点において、*Frozen* の世界観・人間観は、仏教のそれと極めて高い親近性を示していると判断することは許されよう。

Frozen と仏教との親近性について、さらに付言しておきたい点がある。それは、エルサがハンスに「アナは死んだ」と聞かされる場面と、『法華経（*Saddharmapuṇḍarīka, SP*）』の「如来寿量品（*Tathāgatāyuṣpramāṇa-parivarta*）」に説かれる「良医の譬え（良医治子喩）」[18] との共通性である。その概要を紹介しておこう。

一人の医師 vaidyapuruṣa があった。彼には多くの子があったが、彼が外国に行っている間に誤って毒を飲んでしまい、瀕死の状態になってしまった。帰ってきた父親は即座に勝れた治療薬 mahābhaiṣajya を作り子供たちに飲ませようとした。一部の子供たちは飲み、その苦しみから完全に解放された tasmād ābādhāt sarveṇa sarvaṃ vimuktā bhaveyuḥ。ところが一部の子供たちは「父上、私たちの命をお救い下さい dadasva nas tāta jīvitam」と救済を願いながらも、毒のせいで想いが顚倒しており viparītasaṃjñin、せっかくの治療薬を飲もうとしない。そこで父親は外出し、遣いの者を自宅に送って[19]、外出先で自分は死んでしまったと衰弱した息子たちに告げさせた kālagatam ātmānaṃ teṣāṃ glānānāṃ putrāṇām ārocayet。最愛の父の訃報に接し、顚倒した想いを持っていた子供たちも正気を取り戻し、父の形見である治療薬を服用することができた。全員が快癒を遂げた後、父と子供たちは再会を果たす。

以上が「良医の譬え」の概要である。いかがであろうか。エルサがハンスに「アナは死んだ」と聞かされる場面と、本質的な共通性があることが知られるであろう。エルサも一部の息子たちも、はじめは「自分は呪われていて困った」、あるいは「自分は毒薬を飲んで困った」と、自分のことで精一杯であり、他者を考慮すること、特に、彼らを思ってくれる大切な人（アナや父親）がどれほど悲しんでいるかを理解しようとしていない。まさに「自分が大事」という身勝手な渇愛に衝き動かされていたのである。それが「妹は死んだ」、あるいは「父親は死んだ」という知らせを受け、大切な人がいなくなってしまったことを自覚したことで、「大事なものの重心」がはじめて自分から大切な人へと移動し、やっと自分ではなく相手のことを思うことができるようになった。仏教的にいえば、渇愛が慈悲へと転じている時点で、少なくともその時点においては無明はコントロール下に置かれ、〈相手のことを思う自分を形成する善いサンスカー

ラ〉が発動されていることになる。その結果、エルサにおいては、それまで放置（“let it go”）されていた外と内両方の嵐が鎮まり、毒を飲んだ子供においては放逸（“let it go”）な顛倒の想いが止むこととなったのである。

大乗経典文学の白眉と呼ばれ、アジア各地の仏教文化圏に最も大きな影響力を与えてきた『法華経』[20] と、世界中の人々に受け容れられ彼らに感動を与えた *Frozen* との間に共通性がある理由は、時代や地域や宗教の違いを超え、「人にとって本当に大切なものは何か[21]」を訴える力を両者が共有しているからなのであろう。

5．結論

本研究はディズニー映画 *Frozen* を題材に、そこに表明されている世界観・人間観が宗教的なものと見なせること、および、その宗教はキリスト教をはじめとする一神教ではなく、仏教との類似性が極めて高いことを指摘した。しかし筆者は、*Frozen* の世界観・人間観は必ず宗教（特に仏教）と関連づけて理解しなければならないと主張したり、 *Frozen* の製作者サイドに仏教の素養があったなどと主張するものではない。筆者が本研究を通して確認したかったことは、世界中で受け容れられ、世界中の多くの人々を感動させた *Frozen* という作品を、宗教（特に仏教）的世界観・人間観から見通すとき、従来よりも深い理解がもたらされる可能性が存することである。ただし、*Frozen* の世界観・人間観が仏教的な世界観・人間観と高い親近性・相応性を持っていること自体は、確度の高い事実であるといってよい。

交通手段や通信手段の発達や、世界の政治体制の変化にともない、高かった世界の垣根が低くなっている今日、人々の交流も一層盛んになっている。このことは同時に、異なった文化背景を持った人々が相互に交流し、ときにはぶつかり合わなければならない機会がさらに増えたことを意味している。そのような状況下では、全員が同じ価値観を持ち、同じ方向だけを向いて進むなどということは到底期待できないし、また、期待してはならない。多様な価値観を持つ者同士が「そのまま、ありのまま」に尊重され、相互に幸せにならなければならない。その際の「そのまま、ありのまま」が、放逸なものであってはならないことは、本稿で詳しく見てきた通りである。

Frozen は違う者同士が、不放逸に努力しあう中で成立する〈本当のそのまま、ありのまま〉の素晴らしさと、そこからもたらされる幸せを描き出し、そして世界の多くの人々がその提案を受け容れ、称讃し、感動した。興味深い点は、それが奇しくも、仏教が提示する世界観・人間観と極めて高い親近性を示していることである。筆者はここに、仏教の素養を持った人々―それは必ずしも仏教徒であることを意味しない。〈諸行無常＝サンスカーラの無常性〉に立脚する仏教の知識を正しく持ち、それを実生活に活用できる能力を持った人々―が、これからの世界でますます必要とされ、また、活躍する可能性を示唆し、本研究の結論とする。

〈略号および使用テクスト〉

SP　*Saddharmapuṇḍarīka.*

SP_S　*Saddharmapuṇḍarīka*, ed. H. Kern and Bunyiu. Nanjio. St. Petersburg: BIBLIOTHECA BUDDHICA, 1908-1912.

SP_{C2}　Second Chinese version of the *SP*, T. No. 262. *Miafoa lianhua jing*（妙法蓮華経）, trans. Kumārajīva（鳩摩羅什）.

Vin　*Vinaya-piṭaka*, 5 Vols., London: Pali Text Society.

T.　Taisho Tripiṭaka（大正新脩大蔵経）。

（参考文献、資料）

小野昌弘［2014］"Let it go" と「ありのまま」の違い，http://bylines.news.yahoo.co.jp/onomasahiro/20140527-00035720/，2014 年 8 月 2 日参照.

鈴木隆泰［2014］『本当の仏教 ―ここにしかない原典最新研究による―』第 1 巻，東京：興山舎.

［2014a］『法華経』はやっぱり凄い，宗教文化誌『法華』1062，東京：法華会，pp. 12-15.

田村芳朗［1975］『日蓮 ―殉教の如来使―』，東京：NHK 出版.

中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士（編集）

［2002］『岩波仏教辞典　第二版』，東京：岩波書店.

平川　彰［1982］大乗仏教の成立と法華経の関係，『法華経の文化と基盤』（塚本啓祥編），京都：平楽寺書店，pp. 3-37.

［1983］大乗仏教における法華経の位置,『法華思想（講座・大乗仏教 4）』（平川彰他編），東京：春秋社，pp. 1-45.

宮沢賢治［1997a］『農民芸術概論綱要』，http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/2386_13825.html，2014 年 12 月 15 日参照.

［1997b］『雨ニモマケズ』，http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/45630_23908.html，2014 年 12 月 15 日参照.

---

[1] http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%8A%E3%81%A8%E9%9B%AA%E3%81%AE%E5%A5%B3%E7%8E%8B（2014 年 12 月 9 日参照）。日本での公開は 2014 年 3 月であった。

[2] 同作品のストーリーについては、Web サイト「http://ja.wikipedia.org/wiki/% E3% 82% A2% E3% 83% 8A% E3% 81% A8% E9% 9B% AA% E3% 81% AE% E
5% A5% B3% E7% 8E% 8B#.E3.82.B9.E3.83.88.E3.83.BC.E3.83.AA.E3.83.BC」等を参照されたい。なお、タレントの伊集院光氏のように、同作品のストーリーを評価しない人もいることを付言しておく（http://www.j-cast.com/2014/04/30203600.html、2014 年 12 月 10 日参照）。

[3] 作詞・作曲はクリスティン・アンダーソン＝ロペス Kristen Anderson-Lopez とロバート・ロペス Robert Lopez。作品中の挿入歌としてはイディナ・メンゼル Idina Menzel が、エンディングソングとしてはデミ・ロヴァート Demi Lovato が歌唱している。同曲は 2014 年第 86 回アカデミー賞の歌曲賞を受賞している（http://www.cinemacafe.net/article/2014/03/03/22085.html、2014 年 12 月 9 日参照）。

[4] http://ja.wikipedia.org/wiki/% E3% 83% AC% E3%
83%83%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%A4%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%B4%E3%83%BC_%28%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%BA%E3%83%8B%E3%83%BC%E3%81%AE%E6%9B%B2%29（2014 年 12 月 11 日参照）。

[5] http://matome.naver.jp/odai/2139934864318772101, http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AC%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%A4%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%B4%E3%83%BC_%28%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%BA%E3%83%8B%E3%83%BC%E3%81%AE%E6%9B%B2%29（2014年12月11日参照）。

[6] To dismiss from one's thoughts; to abandon, give up; to cease to attend to or control.（*Oxford English Dictionary*）。Forget it.; Stop worrying about it.（http://idioms.thefreedictionary.com/Let+it+go、2014 年 12 月 12 日参照）。

[7] 実際、*Oxford English Dictionary* は注 6 で挙げた以外にも、To allow to escape; to set at liberty; to lose one's hold of; to relax (one's hold); to drop (an anchor). to let go one's hold. To fire off (ordnance), discharge (missiles). 等の種々の意味、用例を記載している。

[8] 他にも、“let it go” と「ありのままの」との音の共通性に配慮したものとの指摘がなされている（http://thepage.jp/detail/20140503-00000010-wordleaf、2014 年 12 月 17 日参照）。

[9] 本稿が参照した *Frozen* は、北米版 BD&DVD（ASIN: B00G5G7K7O, EAN: 0786936838923）、および日本版『アナと雪の女王』BD&DVD（ASIN: B00KLBPS1Y, EAN: 4959241753489）である。英文字幕も適宜参照したが、誤っていると思われる箇所は、筆者の判断に従い訂正した英文を記した。和訳は全て筆者が施したものである。

[10] 本章で取りあげる「あらすじ」は *Frozen* のストーリー全体を包括的に網羅したものではなく、本研究の考察に必要な部分に限ったものであることを、予め断っておく。

[11] このことは、誤ってエルサに氷の魔力を当てられたアナをトロールに看てもらう際に、「この能力は生

来のものですか、それとも誰かに呪われたものですか？（Born with the powers, or cursed?）」と問うトロールの長に対して、父である王が「生まれつきだ。（Born.）」と答えていることから確認できる。

[12] このことに対しては、「いや、ネイティブの理解からしては、通常“忘れてしまいなさい”“気にするな”以外の意味は出てこない。このような解釈は、ネイティブの理解を無視したものだ」という反論が呈せられるかもしれない。ところが実は *Frozen* の製作者サイドが主題曲 Let It Go に先立ち、イントロ曲である Frozen Heart（作詞・作曲：クリスティン・アンダーソン＝ロペス Kristen Anderson-Lopez とロバート・ロペス Robert Lopez）の中において、「本作品では“let it go”を“忘れてしまいなさい”“気にするな”だけではなく、文法的原義に立ち返った意味でも使うぞ」と教えているのである。それは、氷職人たちが凍った湖から氷を切り出し、引き出すシーンの「足元に気をつけろ。〔氷を湖から〕引き抜け！（Watch your step. Let it go!）」という歌詞である。他にもこの曲には「凍り付いた心に気をつけろ。（Beware the frozen heart.）」など、本編のストーリーを暗示する歌詞が散見され、この事実についてはウォルト・ディズニー・カンパニーも公式ブログで認めている（http://blogs.disney.com/oh-my-disney/2014/12/19/frozens-opening-song-predicts-the-whole-movie/?cmp=SMC|fro|natural|blgomd|OMDDecember|FB|frozenopen-Frozen|InHouse|2014-12-19|||esocialmedia、2014 年 12 月 19 日参照）。

[13] 例えば「慎重だ」という長所が、時には「決断が遅い」という短所として評価されることもある。

[14]「ヨハネの手紙一」第 4 章 19-21（日本聖書協会刊行『聖書　新共同訳』による）。

[15] 田村［1975: 200-202］参照。

[16] 布施は、大乗仏教において菩薩（ぼさつ） bodhisattva（覚りを求めて修行する衆生）に課せられる六波羅蜜（ろくはらみつ） ṣaṭ-pāramitā でも筆頭に挙げられている。中村［2002: 864, 1073］参照。

[17] *Vin* i. 21.10-22, 他多数。

[18] SP_S 320.6-322.13, SP_{C2} 43a8-b5。良医の譬えは古来、「法華七喩（ほっけしちゆ）」のひとつとして有名である（中村［2012: 929］参照）。

[19] 遣使還告（SP_{C2} 43a28）。SP_S にはこの記述はない。

[20] 平川［1982］［1983］参照。

[21] 鈴木［2014a］を参照されたい。